

## 「ほめ」が成功、失敗する要因

### —「明示的ほめ」と「暗示的ほめ」の比較から—

市川真未（創価大学大学院生）

#### 要 旨

日本語母語話者の使用する「ほめ」に関して「明示的ほめ」と「暗示的ほめ」の特徴から「ほめ」が成功する要因、失敗する要因を探った。「明示的ほめ」と「暗示的ほめ」それぞれの特徴に加え、ほめ形式の明暗に関わらずほめが成功する要因、失敗する要因についても言及することができた。

キーワード：明示的ほめ、暗示的ほめ、FTA、発話機能

#### 1. はじめに

「ほめ」は「話し手が聞き手を心地よくさせることを意図し、聞き手あるいは聞き手に関わりのある人、物、ことに関して「良い」と認める様々なものに対して、直接的あるいは間接的に肯定的な価値があると伝える言語行動」である(金 2012)。

「ほめ」は聞き手を心地良くさせるという性質上、会話のきっかけ作りや聞き手との連帯感、関係性の強化、FTA 補償ストラテジーなど、ポジティブポライトネスストラテジーとして機能することが多い。しかしながら、「評価を与える」という性質上、状況によっては羨望や皮肉など、「ほめ」自体が FTA となったり、ほめ受け手にとって「ほめ」を受け入れるか否定するかという選択を迫ることからポジティブフェイスを脅かす発話機能であるとも言える。

このことから本稿では FTA になりうる「ほめ」の実態を探る前段階として、ほめ成功の例から「明示的ほめ」と「暗示的ほめ」の傾向を見出し、それぞれがどのような条件下でどのような機能を果たすのかについて調査、考察する。

#### 2. 先行研究

「ほめ」の分類は川口他(1996)の、「実質ほめ」(相手自身、相手に関するものごとなどについて心から高い評価をしたいときに用いる「ほめ」と「形式ほめ」(ほめること自体に表現意図があるわけではなく別の表現意図のために行う「ほめ」)や林(2003)の「全体ほめ」(対象を丸ごとほめる)と「部分ほめ」(部分を特定してほめる)などが挙げられるが、Holmes(1988)、小玉(1996a, b)、大野(2007)、金(2005, 2012)など、多くの先行研究では「肯定的評価語を含むか、その他の形式を使うか」という観点から「明示的ほめ」と「暗示的ほめ(暗示的表現)」という枠組みから考察を行っている。本稿はこの「明示的ほめ」と「暗示的ほめ(暗示的表現)」の枠組みを援用し、考察していく。

「ほめ」が FTA になる要因について言及している先行研究はいくつかあるが、ここでは以下の3つを挙げる。

山路(2006)は「ほめ」とそれに隣接する言語行動について、「発話意図」「伝達内容」「発

話内容（形式）」の3つの軸で整理をし、「伝達内容」も「発話内容（形式）」も肯定的評価であるにもかかわらず攻撃的に作用している場合について、その要因を二者間の人間関係も含むコンテクストとの整合性、イントネーションなどの音声的な特徴、文体、それぞれの性格や好み、その時の気分など、様々な要素が複雑にからんでいるということを前提としつつ、①聞き手の優越性や自賛意識にあからさまに言及することと②聞き手が評価の対象とされたくないと思っているトピックに言及することであると述べている。肯定的評価を直接表現せず、暗示的または否定的評価を装って伝える場合は、発話内容が攻撃的に作用することを避けるためのストラテジーであると論じている。

大野(2007)では「ほめは相手や場面に応じて適切に使用されるべき待遇表現であり、評価を下すという性質上、特に目上に対して行う場合には配慮や工夫が必要である」とし、暗示的ほめについて、「事実指摘、羨望、感情、感謝、ねぎらい、祝賀などの「言語行動 X」での表現が用いられるならば、言語表現 X 特有の表現がほめとしても認識されうることにより、言語行動 X はほめに近い性質を有する」とし、上下関係の想起によって生じる FTA は言語行動 X を用いることで回避できると論じている。

古川(2010)では「ほめ」が皮肉や苦情として機能する原因は①「ほめ」の対象の不一致②疎の関係における「ほめ」の基準の不一致（社会的基準／専門的基準）③パラ言語表現による解釈であるとしている。

ここまでの先行研究を概観してみると、「ほめ」が FTA になる要因については解明されつつあるが、同じ条件下で「明示的ほめ」と「暗示的ほめ」の比較がなされていないため、それぞれの特徴が明確にはあらわれておらず、信憑性に乏しい。また、異条件下での比較調査で「明示的ほめ」は目上の者に使用することは避けるべきである、「暗示的ほめ（表現）」を使用することで FTA を緩和することが可能であるといった考察も問題点として挙げられる。

そこで本稿では同じ条件下で「明示的ほめ」と「暗示的ほめ」がどのように機能するのかを調査する。

### 3. データ収集

#### 3.1. ほめの対象

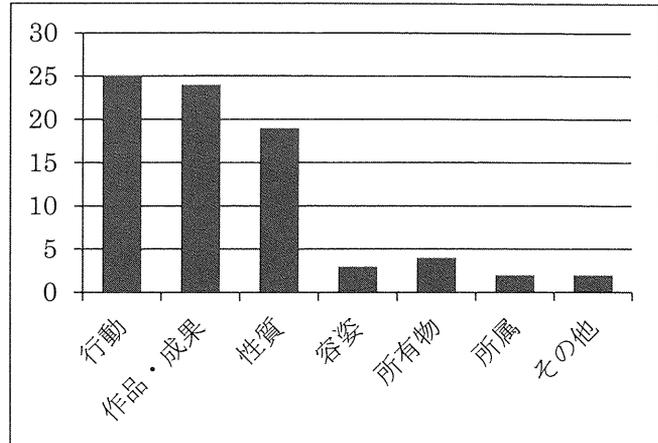
本稿ではまず日本人がどのような表現をほめと認識し、どのような形式を用いてどのようなものを対象としているのかを少納言や名大会話コーパス、聞蔵Ⅱビジュアルなどを利用し、調査した。自然会話では会話中の当該発話が「ほめ」であるかどうかの判断が困難であるため、「ほめ（褒め・誉め）」「とほめ（褒め・誉め）」「ってほめ（褒め・誉め）」で検索をし、明らかに「ほめ」であるもののみ収集した。文脈から何をほめているのか判断できないもの、ほめが失敗しているもの（明らかに皮肉と判断できるもの、ほめとして相手に伝わっていないもの）はここから排除した。

データの総数は96例であった。（内訳：「ほめ」4例、「とほめ」53例、「と褒め」26例、「てほめ」7例、「て褒め」6例）ほめの対象別に分類したのが以下の表とグラフである。

〔表1〕ほめの対象

	ほめ数
行動	33
作品・成果	27
性質	14
容姿	10
所有物	5
所属	2
その他	5

〔図2〕ほめの対象



「その他」には自分の努力でも性格でもない、通常ならほめに値しないような以下のよ  
 うなデータを分類した。

(1)「森のセラピーストレッチ」はみっちり30分間。山田智美さん(50)のお手本に  
 あわせて緑の上に寝っ転がれば「もう、仕事なんてどうでもいい……」。そう思うほどリラ  
 ックスできたので、開始前より血圧も下がり、唾液(だえき)で測定したストレス値も「や  
 やあり」から「ほぼなし」になりました。「取材してたのにこんなに下がるなんて不思議  
 議、すごいですね」と褒められ?ました。(2014年10月08日朝刊石川全県・2地方)

ほめ数の多かった行動や作品・成果はそこに努力をした事実があり、それを認めて肯定  
 的な評価を与えることは当然ともいうべきことであり、ほめは成功しやすいと考えられる。  
 ほめ手が専門性や年齢の点でほめられ手よりも上であればほめの成功率はより高くなるだ  
 ろう。

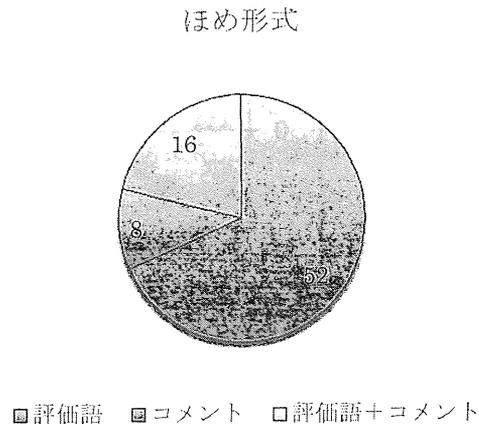
容姿、所有物に対するほめ数が少なかった要因は書き言葉データを扱ったことが第一  
 だと考えられるが、山路(2006)に挙げられていた②聞き手が評価の対象とされたくないと思  
 っているトピックに言及することも少なからず関係していると考えられる。容姿に関し  
 ては特に、ダイエットやスキンケアなど、日ごろからの努力があり、ほめ手とほめ受け手  
 の間でそれが共有知識として存在しているのであれば、ほめの成功率は上がるだろうが一  
 般的な概念として言及しにくいトピックであろう。

### 3.2 ほめの形式

「ほめ」の形式は金(2012)を一部援用し、①明示的ほめ②暗示的ほめ③明示的ほめ+暗  
 示的ほめの3つに分類した。①は肯定的な意味を含む名詞、形容詞、副詞を使用し、評価  
 をしているもの、②は陳述や例示、激励、祝賀、他者排除など、賞賛以外の発話機能を用  
 い、評価語は使用していないもの、③は肯定的な評価語に加え、他の発話機能やなぜその  
 ような評価をしたのかの理由などが明示されているもの、という筆者の基準で分類をした。

その結果、評価語のみでほめを行った例 52、評価語を使用せず他の機能を用いた例は 8、両方を用いたものは 16 であった。

〔図 2〕 ほめ形式



ほめが成功する場合は評価語を用いているものがはるかに多かった。書き言葉データの場合、ほめであることが明確に読み手に伝わるよう、発話を詳細に記載することよりも評価語を使用して端的に書くことが優先されたのではないかと考えられるが、一般的に「ほめ」と認められる発話には評価語が多く用いられるということはこの結果から言えるのではないだろうか。また、多く使用された評価語は「よい・いい」(23 例)、「よく」(11 例)、「すごい」(12 例)、「上手」(12 例)、「おいしい」(2 例) などであった。先行研究でよく取り上げられる「かわいい」や「かっこいい」などの評価語は容姿や持ち物などを対象にした例自体が少なかったため、データ数も「かわいい」が 1 例、「かっこいい」0 例とほぼないに等しかった。

#### 4. インタビュー調査

##### 4.1 調査方法、調査対象

「明示的ほめ」と「暗示的ほめ」を同じ状況下で用いられた場合、どのような印象の違いがあるのか、専門性や年齢の上下によってその印象は変わるのか調査を行った。対象者は 20 代の男女 19 名（男性 8 名、女性 11 名）である。

##### 4.2 調査内容

「明示的ほめ」はコーパスデータでも多く用いられていた形容詞（いい、すごい、上手な、おいしい）と先行研究でよく用いられる形容詞（かわいい、かっこいい、優しいなど）を用いた。「暗示的ほめ」は「ほめ」と隣接する発話機能（陳述、感謝、激励、労い、感情表出、願望表出など）をそれぞれのほめの対象に合わせ、不自然のないように選択し、インタビューを行った。「暗示的ほめ」の項目で使用した発話機能は限定せず、あくまでも「明示的ほめ」と比較するためのサンプルとして提示した。そのため、対象者から提示された他の発話機能があった場合にはその発話機能での印象を答えてもらった。「作品・成果」と

「所有物」に関しては分類が大きすぎると考え、それぞれに関してより詳細に（「所有物」は「持ち物」と「家族」で分けて）質問した。

「明示的ほめ」と「暗示的ほめ」の定義はインタビュー終了後に伝え、何か思いついたものがあつた場合は感想として述べてもらった。

ほめの受け取り方には個人差が大きいという点も考慮し、インタビュー項目に加え、「あなたはほめを素直に受け取れる性格か」「あなたは人との差を気にする性格か」ということも質問した。

〔表2〕インタビュー項目例

	明示的ほめ	暗示的ほめ
1. 行動	すごいね	《陳述》頑張っているね
2. 作品・成果	上手だね、すごいね、おいしい	《祝賀》おめでとう 《感情表出》初めて作ったの？（驚き）
3. 性質	頭いいね、気が利くね、優しいね	《感謝》Vてくれてありがとう
4. 容姿	かわいいね、かっこいいね	《感情表出》すきです 《願望表出》なりたい
5. 所有物	かわいいね、かっこいいね	《願望表出》いいなー（羨望）
6. 所属	いい〇〇だね	《願望表出》所属したい、うらやましい（羨望）

【インタビュー項目】

Q1 仕事に関する勉強やスキルアップのために日々努力をしているのを職場の上司や先輩など、自分よりも専門性の高い人物に「すごいね」、「いいね」と言われた場合、どのような印象を受けますか。また同じ状況、同じ人物に「がんばったね」と言われると印象は変わりますか。

Q2 Q1と同じ状況で後輩など自分よりも専門性の低い人物から同じことを言われた場合、それぞれどのような印象を受けますか。

Q3 あなたが時間をかけて作った作品（絵、料理、ろくろで作った花瓶など）を自分よりも専門性の高い人物に「すごいね」、「上手だね」と言われた場合、どのような印象を受けますか。また同じ状況、同じ人物に「え？初めて作ったの？」と驚かれた場合、印象は変わりますか。それが作品ではなく、業績などの目に見えない成果を対象としたとき、同じように言われた場合、それぞれどのような印象を受けますか。（「暗示的ほめ」は《祝賀》に変更）

Q4 Q3と同じ状況で後輩など自分よりも専門性の低い人物から同じことを言われた場合、それぞれどのような印象を受けますか。

Q5 あなたの性格について自分よりも年齢や役職が上の人物に「気が利くね、優しいね、頭いいね」などと言われた場合、どのような印象を受けますか。また同じ状況、同じ人物に「助けられているよ、ありがとう」などと感謝された場合、印象は変わりますか。

Q6 Q5と同じ状況で後輩など自分よりも年齢が下の者に同じことを言われた場合、それぞ

れどのような印象を受けますか。

Q7 髪型や化粧など時間をかけてセットをしたとき、自分よりも専門性の高い者（美容師やメイクの仕事をしている人物）に「かわいいね、かっこいいね」などと言われた場合、どのような印象を受けますか。また同じ状況、同じ人物に「その髪型／化粧すきだよ」などと言われた場合、印象は変わりますか。また、髪型や化粧など時間をかけてない場合にはそれぞれどのように印象が変わりますか。

Q8 同じ状況で、自分よりも専門性の低い人物（髪型や化粧などにあまり興味のない人物）に同じことを言われた場合、それぞれどのような印象を受けますか。

Q9 「いい家族ですね」と言われた場合、どのような人物に言われても嫌な気はしませんか。もしするとしたらどのような場面、人物に言われた時ですか。

Q10 持ち物について「かわいいね、かっこいいね」と言われるのと「いいなー」と言われるのでは印象に際はありますか。

Q11 あなたが所属している大学や会社について話した時、あなたよりもいい大学、会社に所属している人物に「すごい大学だね、いい会社だね」などと言われた場合、どのような印象を受けますか。また同じ状況、同じ人物に「入りたいな、うらやましいな」と言われると印象は変わりますか。

Q12 同じ状況でまだ大学や会社に入っていない人物から同じことを言われた場合、それぞれどのような印象を受けますか。

#### 4.3 調査結果

インタビュー調査で答えてもらったものをそれぞれの形式、人物、対象においてポジティブな印象は○、ネガティブな印象は×、普通、聞き流すと思うなどは△で分類した。「状況によってポジティブ、またはネガティブになる」というものはこの分類表には含めなかった。

〔表3〕インタビュー調査の結果

		明示的ほめ	暗示的ほめ
1. 行動	上→	○12 △5 ×2	○15 △2 ×2
	下→	○5 △8	○9 △8 ×1
2. 作品	上→	○13 △2 ×4	○10 △3 ×6
	下→	○10 △5	○12 △2 ×1
2. 成果	上→	○12 △2	○11 △3
	下→	○10 △5	○10 △3
3. 性質	上→	○13 △2 ×2	○15 △2
	下→	○8 △4 ×5	○15 △2
4. 容姿	上→	○11 △2 ×5	○9 △6 ×2
	下→	○9 △6 ×3	○9 △8 ×2

5. 所有物	上→	○8 △1 ×4	○6 △2 ×3
	下→	○5 ×5	○7 △2 ×1
5. 家族		○17 △2	
6. 所属	上→	○9 △4 ×5	○6 △7 ×3
	下→	○13 △4 ×1	○10 △4 ×2

インタビュー調査の結果、「明示的ほめ」、「暗示的ほめ」の形式にかかわらず言えることとしては、ほめられ手がほめ手に対して敬意がある場合には努力が含まれる行動や作品・成果に対しての「ほめ」は失敗することは少なく、素直に受け入れられるようである。

成果に関するほめは「明示的ほめ」、「暗示的ほめ」ともにネガティブな印象がなかった。上からのほめも下からのほめもネガティブな感情がなかったのには、やはりほめられるに値する対象であるとほめ手もほめられ手も認めているということが言えるだろう。

容姿に関しての「ほめ」は、「自分がかわいいと思っている人に認められるとすごくうれしい」「頑張ってたよ良かったと思える」などポジティブな意見が多かったが、その一方で、「照れるのでやめてほしい」「努力をしても限度があるので言及されるとはずかしい」「気合を入れているみたいで嫌だ」とネガティブな意見もあった。数でみると行動や作品と似たような数値になっているが、容姿に関しての「ほめ」はその過程での努力を見られたくない、または見ていないのに言及されてもうれしくないというネガティブ感情が存在しており、その点で行動や作品と異なる意見が挙げられたと考えられる。

また、自分でこだわりや自信がある部分が「ほめ」の対象となった場合は、「明示的ほめ」では「社交辞令で言っているだけ」「誰にでも言えそうなことだから会話の流れとしてほめてくれているだけだと思う」など、物足りなく感じるという意見も多数あった。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では日本語母語話者の「ほめ」の対象、形式をコーパスから収集し、「明示的ほめ」と「暗示的ほめ」の特徴をインタビュー調査により説明をした。

「ほめ」が成功する条件は行動や作品・成果など、ほめられ手が努力をした事実が明白であり、それを評価される人物からほめられた場合である。この場合は多くの場合、形式の明暗は深く関わらない。ほめられ手がほめ対象に対してネガティブな感情がある場合には山路(2006)に挙げられていた②聞き手が評価の対象とされたくないと思っているトピックに言及することになるため、形式の明暗にかかわらず「ほめ」はFTAとなる。

「明示的ほめ」はほめ手がほめられ手より上の者の場合は受け入れられることが多いが、ほめ手がほめられ手よりも年齢や専門性の点で下の場合には場合は「暗示的ほめ」の方が受け入れられる傾向にあると言えよう。「明示的ほめ」は深く入り込まない「ほめ」であり、ほめられ手が「もっと賞賛されたい」と思っている場合には物足りなさや適当に扱われたという印象を受け、FTAになりうるが、ほめられ手が謙遜するような対象への「明示的ほめ」は会話の潤滑油として作用するのではないかと考える。しかしながら、ほめられ手の自信の大小やほめられ手への敬意の大小によりこの結果は変化してくる可能性もある。

今後はこの2つの軸に基づき、アンケート調査を行い、より詳細なデータを収集、分析する予定である。そこから日本語教育にも活用できるほめの理論を確立させたい。

#### 参考文献

- 袁 帥 (2012)「日中接触場面における「ほめ」—中国人日本語学習者の「ほめ」の言語行動と言語問題を中心に—」『外来性に関わる通時性と共時性 接触場面の言語管理研究』Vol.10 107-122
- 大野敬代 (2007)「「ほめ意図表現」の枠組みと機能」『早稲田日本語研究』16号 109-120
- 川口義一, 蒲谷宏, 坂本恵 (1996)「待遇表現としてのほめ」『日本語学』Vol.15 5月号 13-22
- 金庚芬 (2005)「会話に見られる『ほめ』の対象に関する日韓対照研究」『日本語教育』124号 13-22
- 金庚芬 (2012)『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』ひつじ書房
- 小玉安恵 (1996)「対談インタビューにおけるほめの機能(1)—会話者の役割とほめの談話における位置という観点から—」『日本語学』Vol.15 5月号 59-67
- 小玉安恵 (1997)「対談インタビューにおけるほめの機能(2)—会話者の役割とほめの談話における位置という観点から—」『日本語学』Vol.15 6月号 84-92
- 古川由理子 (2003)「書き言葉データにおける<対者ほめ>の特徴—対人関係から見た「ほめ」の分析」『日本語教育』117号 33-42
- 古川由理子 (2010)「『ほめ』が皮肉や嫌みになる場合」大阪大学留学生別科研究紀要『日本語・日本文化』36号 45-57
- 丸山明代 (1996)「男と女とほめ大学キャンパスにおけるほめ行動の社会言語学的分析—」『日本語学』Vol.15 5月号 68-80
- 山路奈保子 (2006)「日本語の「ほめ」についての一考察—「ほめ」を攻撃的に作用させる要因の分析—」『日本語教育』130号 100-109
- Holmes, J. (1988) Paying compliments: A sex-preferential politeness strategy", *Journal of Pragmatics*, vol. 12, 445-465

(市川真未、創価大学大学院文学研究科国際言語教育専攻修士課程、e13m3103@soka-u.jp)